

間接学習について

外池 俊幸

0. まえがき

本稿では、何かを学習する際に、学習する対象を直接学ぶのではなく、一見別なことを学ぶのだが、結果として、間接的にある対象を学ぶことになっていることを間接学習と呼び、関連する問題を考える。

実際には、さらに広く、何かの科目の練習問題を解くなど、一つの正解を求めることを行うのとは違い、正解が一意に決まらない、あるいは正解がない、さらには解けるかどうか分からない問題を考えることの重要性についても論じる。

間接学習の分かりやすい簡単な例としては、TOEICなどの点数を上げるために作られた教材で英語を学習するのではなく、例えば、英語学習者向けの多読教材を読むことで、結果として英語の学力を高めるといことが考えられる。さらには、英語の学習を直接目指すことは考えないで、必要に応じて、英語で書かれたものを読むことで、情報を得るなどの必要が満たされ、結果として英語の学習が進むということもある。言い換えると、英語学習のために作られた教材で学ぶのではなく、英語学習者のために書かれた英語の文章を読むのでもなく、例えば、料理をしたい人が、英語で書かれた料理の本を読んで、料理の仕方を学ぶ、あるいは、英語で書かれた専門領域に関する教科書で、その専門領域に関して学ぶ。それが結果として、英語の学習を促進することになり、英語の学力を上げる。さらには、英語で書かれた娯楽のための物語である、ペーパーバックを読んで、ストーリーを楽しむ、結果として、英語の学力が上がることも含まれる。

1. 発端

本稿で取り上げる広い意味での間接学習について考えるきっかけは、ランディー・パウシュの「最後の授業」で、ランディー・パウシュが間接学習を重視しているのを知ったことである。何かを学ぶには、それを直接学ぶのではなく、別の対象を考えて、その対象に関して何かを行うことで、結果として当初考えていた対象を学ぶことが重要だと言っている。アリストと名付けられたプロジェクトで、物語を考え、それを動画にするこ

とで、結果として作成に使ったプログラミング言語 Java を学ぶことになる。しかし、ランディー・パウシュの考えていた間接学習は、それに限定されるものではない。特に、スポーツにおける間接学習にも言及していた。本稿では、間接学習の可能性の広がりを考える。

2. 難しい問題を解く、正解のない問題を解く、評価が分かれる課題に挑む

難しい問題は後回しにすること、あるいは、言い換えると、難しい問題は解かなくもいいということを繰り返し教えてきた日本の教育の抱える大きな問題は、多くの人が気付いていることだと考えられる。つまり、限られた時間を設定して、その時間内で問題を解いて、その点数の多さを競うのが、日本で行われてきた筆記試験である。やさしい問題から解いていかないと、時間を無駄に使うことになるので、点数が取れないという結果に終わってしまう。それで、難しい問題は解かなくもいいという教育をしていることになるというのである。

松本（1999）が同様の指摘をしている。松本 元自身が、世界でまだ誰も解いていなかった、大きなヤリイカの人工飼育を行えるかどうかという問題を解いた経験者である。松本が成功するまでは、世界中の誰一人として成功していなかった。それは、出来るかどうか分からない問題だった。解けないかもしれない問題に立ち向かっていたことになる。そして、3年あまりの挑戦の末に成功する。そういう経験のある人が行う、解けない問題は解かなくもいいという日本の教育への批判には、説得力がある。

以下は具体的なエピソードの紹介である。ある国立大学に移った問題解決などを主に研究している教員が、半期の授業を担当し、最後に筆記試験を行った。ある問題を設定し、どうするかを論ぜよという問題であった。その試験が終わってから、複数の学生が抗議に来たという。その抗議は、どういうものかと言うと、授業というのは、問題の解き方を教えてくれて、最後の試験は、授業で習った解き方で解けば解ける問題を出すものだということである。解き方が決まっている問題を解くという教育の根深さを感じる。

松本 元（1999）によると、ヒトは、解いたことがない問題を解くことができる力を持っている。松本が問題だと言っているのは、日本の教育である。解ける問題から解くように。簡単には解けそうにない問題は解かなくていいと、繰り返し教え込まれてきている。ヒト（あるいはヒトの脳）は、進化の結果、解けない問題を解こうとするようになった。その能力を無理に抑えるのはよくないということである。言い換えると、難しい問題を解こうとしたことを評価できる方法を考えないといけないということである。

3. 授業内容の明確化と標準化

3.1 オープン・コースウェア

オープンコースウェアは、MIT がはじめた授業内容の公開プロジェクトである。後に日本の大学も加わるようになった。日本の大学では、北海道大、東北大、東京大、名古屋大、京都大、大阪大、九州大、東京工業大、早稲田と慶応が参加した。日本の大学が参加するにあたり仲介役を務めた宮川 繁が、かなり早い段階で、日本の雑誌に以下のような趣旨のことを書いている（ラーマン・宮川（2002））。

簡単に言ってしまうと、授業内容を公開しても MIT は困らないということである。それは、MIT で行われている授業は、MIT の学生と教員との間の interaction によってなりたっているので、授業内容を公開しても、MIT で行われていることを行うことはできないというのである。これは考えてみると、確かにそうだろうと筆者も納得した。しかし、この点を充分理解しないで、OCW を見ている人がほとんどなのではないだろうか。ある国では、MIT が公開した授業内容を、そのまま英語で授業を行うおうと考えているという話まであった。

MIT で行われていることを考えると、少人数の学生と教員との間の interaction だということが分かる。ここで、我々が考えないといけないことは、マスプロ教育という語が死語のように聞こえる現代であるが、多くの学生を相手にできる、e-learning などが、質の高い教育、学習、interaction を保証できるかどうかであろう。

3.2 名古屋大学の学生とある私立大学の理工の学生の一般的比較

名古屋大学である私立大学の理工出身の人が授業を担当された。以下はその人の感想である。名古屋大学で授業を担当してみて思ったことは、名古屋大学の学生の方が、自分が知っている私立の理工の学生よりも総じて優秀なのではないかということである。しかし、私立大学の理工の学生は、学生の数も多く、割と学生同士が仲良くしている。そして、授業で分からないことがあった場合、先生は、学生がそんなところで躓いているなどということには普通気付かない。しかし、学生同士仲がいいと、他の学生が気付いて助けてやるということをやする。しかし、名古屋大学の学生は、自分で分からないとなると、授業に出てこなくなってしまう。その私立大学の理工の学生が、就職しても評判がいいのは、自分だけでやろうとするのではなく、会社の先輩や同僚と協力しながら仕事ができるからではないかというのである。

ここから、日本の教育の大きな問題点の一つが見えてくるのではないだろうか。つまり、成績など人に対する評価は、ずっと、すべて一人の個人を対象に行われてきた。す

べてが、その人個人のこととして評価されるシステムになっている。助けあって作ったものに関して、評価されることが少ない。複数の人間が助けあって課題に取り組むことは、取り組む人の中で必要なコミュニケーションを行うことが要求されて、その学習効果には期待できるにもかかわらずである。

3.3 TOEIC

TOEIC を認めないわけではないが、そして英語も、他の外国語も個々の人がこう学ばよいのではないかという方法で学ばばいいと思うが、TOEIC の点数が高くて、英語の本をほとんど読んだことがないというのでも困るし、実際にほとんど話したこともないというのでも困る。

インターネットでは、かなり知られた人で、TOEIC の受験を続けている人がいる。多読教材を読んだりもせず、シャドーイングをやったりもせず、受験して、点数が取れなかったところを補正するというだけやっていると宣言している。そして、過去に受験した時の点数を公開している。こういう人もいるし、やはり大学受験を目指した時のような勉強方法の方が慣れているから楽だという人もいるのだろう。

筆者には、語学は使って、出力して学ぶのが、言語の持っている社会性から考えて、自然だし、効率的なように思える。

3.4 英語で書かれたものが日本語に訳せること

日本の中学・高校の英語教育では、コミュニケーションの能力を高めることが強調されるようになってきたが、大学入試の英語の試験で高い点数を取ることを目指すことが大きいのだろう、日本語に訳せれば、とりあえずの目標が達成されたと考えられているようであるし、実際そう考えている学生が多いようだ。

伝聞であるが、ある大学で、ある専門の授業を担当していた人が、英語の論文を読んでいた、学生に訳させたら、流暢に訳す。それで、内容について質問したら、ほぼ全く分かっていないことが分かって驚いたという話である。

考えてみると、筆者には、訳すということを一応のゴールとして英語を学んできたから、これはその当然の結果のように思える。筆者は、大学院生時代、技術翻訳のアルバイトをしたことがある。紹介してくれた人から、考えていてはいけない、時間との勝負なので、どんどん訳してしまうようにと指示された。そして、やった仕事が大手の自動車会社が開発した自動車組み立ての大規模なシステムのマニュアルの翻訳だった。実際の内容が分かるわけではないが、こうでしかないだろうという感じで推測しながら訳し

た。はっきり言えば、上前をはねている人が、褒めてくれた。誰でも褒めていたのかもしれない、ともかく褒めてくれた。英語の力のある人は、内容が分からなくてもちゃんとした日本語になっているので、それを渡された人は、あまり迷わず、内容が理解できるのだと言われた。

ここで言えることは、現在の日本の英語教育では、中身が分からなくても訳せれば点数になる教育をしているということだ。しかし、筆者が強調したいのは、英語で書かれたものを内容を理解して読む経験の重要性だ。その意味で、英語学習向け多読教材は、大いに活用してもらいたいものである。そして、それを卒業したら、それぞれもう少し専門的、英語学習者向けでないものを読む段階に進んで欲しい。ここでも、個々の人により、専門により、興味によって、読みたいものが異なるだろう。例えば、オックスフォード大学出版会から出ている *Very Short Introduction to* というシリーズの中から選ぶというのも一つである。

3.5 日本の英語教育に対する批判

日本の英語教育を批判する文章を、グレゴリー・クラークが、英字新聞 *The Japan Times* に何度か発表している Clark (2009, 2010)。

長年日本で英語教育に関わってきたグレゴリー・クラークは、文部科学省の英語教育に関しての方針を批判している。一番重要な点は、文部科学省は英語教育の中身を変えればいよいよ考えているが、問題は、学生のモチベーションだと主張していることだろう。

グレゴリー・クラークの主張に触発されて考えたことだが、まず、日本人のほぼ全員が英語を中学から、さらに最近では、小学校5年生から、学び始めて、高校、大学まで学ぶ体制を変えた方がいいのではないかということは検討する価値があるだろう。小学校での導入にも、反対する意見があるし、筆者も中学からでいいと考えている。

影響が大きい提案であるが、高校での英語は選択にして、大学の入学試験の科目としての英語も選択にするか無くしてもいいのではないか。そして、必要であれば、大学で、大学入試を目指した受験勉強とは異なった英語学習を行う。受験科目としての英語がなくなると、受験産業、塾、予備校などへ波及する影響は大きいであろう。しかし、それくらいのことを考えないといけなのではないだろうか。

そうした後で、グレゴリー・クラークが主張するように、大学に入学してからの語学教育を充実させるのがよいだろう。大学でも英語は選択科目にする。英語以外の外国語の授業の充実をはかることで、外国語というと英語だけというような状態を変えられるだろう。

3.6 コンピュータなどの環境を整えることで英語学習が進むか

英語教育に限らないが、コンピュータなどの電子的な環境の整備が行われてきた。コンピュータの端末をたくさん並べる教室を作る予算要求が行われると、かなり認められてきた。経済効果はあったかもしれないが、学習効果の検証が行われたかどうかである。

一般的に日本は、テクノロジーに弱いという感じがする。それから、多くの人間が学習できる環境を提供できれば、効率よく学習できるのではないかという、充分検証されてはいない暗黙の前提があるように思える。その証拠として、様々な環境整備が進んでも、日本人の英語の試験の点数が、他のアジア諸国と比べてよくなったというデータが出てこないことがあげられる。

そして、さらに言えば、電子的な環境ではなく、道具を使うことを考え直さなければならなくなっていると言えるだろう。

3.7 英語学習者向けに書かれた英語の文章

一般的には、あまり問題にされないようだが、英語を学ぶ人間が触れる英語の文章に関して、英語学習者向けに書かれた英語の文章なのか、そうではなくて、本来必要があって書かれた英語の文章なのかの間には違いがあると思うということを、私に指摘した人がある。例えば、日本の出版社から出ている大学の学生向けの英語の教科書にある英語の文章には、力がない文章が少なくないというのである。あくまで一般的な指摘だが、本来必要があって書かれた英語の文章を読む段階に、早く進むことが望ましいだろう。

4. 教科書で学ぶのではない学習

4.1 英語論文作成のためのカードの自作

これは筆者自身が、卒業論文、修士論文をまとめた際に、誰に言われるでもなく自分で思い付いて始めた方法である。以下で概要を紹介する。

専門の論文や本など、英語で書かれているものを読んでいる際に、内容を理解するというのが本来の目的ではあるが、自分が書く英語の論文で使えるような表現を集めた。例えば、分かりやすい例を挙げると、英語では、例を挙げる場合に、such asを使う。学部生の頃には、この表現をカードに取るということを始めたばかりの頃は、こういう基本的なものもカードに取っていた。B6の厚手のカードを用意して、一番上の幅の広いとこ

ろに、カードに取ろうと考えている表現を書く。この場合は、such as ...。右端に、その表現をカードに取った日付を入れる。筆者は、2010年11月4日であれば、11/4/10と書くことにしている。下の行の1行目に、その表現を拾ったもとの文全部を書き写す。そして、その後に出典を分かりやすく記述する。自分の覚えなので、略語を使ってもいい。

注意したいのは、何をカードに取るのかという基準である。単語をカードに取るのではないということである。何語かから構成される表現が対象であるが、どれを取るかは自分で検討するしかない。

現在であればエクセルのファイルにできそうであるが、B6の大きさで、1枚1枚ばらばらなのがいいのである。時々ばらばらと眺めていると、英語の論文を書こうとしている時に、あれが使えるというふうに思い出すことが出来るし、眺めていて、あっこれがあそこで使えると思うこともある。

著作権を尊重することは重要であるが、ここで紹介した方法では、ある表現をそのまま使うのではないので、問題はない。

4.2 英語を学ぶのではなく、英語を使って何かを知ること、学ぶこと

筆者は、以前から、英語を学ぶのではなく、英語で学ぶということが重要だと考えてきた。ある学ぶ対象があって、それについて英語で書かれたものを読むことで、英語ではなくて、その対象を学ぶ。英語で書かれた論文を読む場合もそうであるし、英語で書かれた本を読む場合も、さらに英字新聞を読むのも、情報を得ようとして英語を読んでいるので、英語を学ぼうとしているわけでは必ずしもない。結果として、英語の学力が上がることになるのである。

分かりやすく、多くの学生に推奨したいのが、英語で書かれた本、なかでも、英語学習者向け多読教材の中から、自分が楽しめそうな本を探して、それを読むことである。名古屋大学では、附属図書館の中央館の3階に、英語学習者向け多読教材がまとめて置かれている。

週に1冊読んで、そのレポートを提出するという形で、授業に取り入れている教員も多い。ただ、1週間に1冊では読む分量が少ないという意見もあり、学生の活用の仕方を、もう少し具体的に指示できるようにした方がよいだろう。この点では、豊田高専が全学的に統一した方式で取り組んでいる。高専と大学との違いもあるので、そのまま取り入れることは難しいかもしれないが、参考にはできそうである。

そして、英語学習者向け多読教材をある程度の冊数読んだら、次の段階である、英語学習者向けではない本物の英語の本を読む段階に進んで欲しい。ここでも、一つの本を

すべての学生が読むのではなくて、学生の興味や専攻などによって、選択できるようにしたい。図書館の3階の多読教材が配置されている書架に、多読教材の隣に、オックスフォード大学出版会から出ている Very Short Introduction to というシリーズが200冊以上配架されているので、その中から選ぶのが一つの方法である。

学習者向けではない英語を読むことについて、考えないといけないこととして、知らない単語が出てきた時にどうするかという問題がある。オックスフォード大学出版会から出ている総合教材には、1番として、「無視する」というのが上がっていて面白いと思ったことがある。もちろんそれで終わっていたわけではなくて、2番として、「文脈から推測できないか考える」というのが上がっていた。これが大事なので、学生にそのことをきちんと伝えたい。

英語で書かれているものから情報を得ることを考えると、英字新聞とか、ホームページに公開されている英語の文章などを読むこともあるだろう。そこで考えた方がいいことは、中学、高校の英語学習と違って、出てくる知らない単語を全部調べるのではなく、大ざっぱでもいいから、大体の内容を理解しようとすることである。これが少しでもできるようになると、中学、高校で学んだ英語の力をさらに活用できるようになる。

4.3 英語を話すことで、何かを知ること、学ぶこと

英語で人と話すことも、英語の運用能力を高めるために、英語を学ぶ方法の一つだと考える人が多いかもしれない。しかし、そう考えるのは望ましくないと感じている。

筆者は、英語の授業で、半期に1, 2回、次の様な、英語で人と話をして、それをレポートとして提出する課題を出している。知らない見ず知らずの外国人に突然声を掛けて話をするのは、必ずしもすすめられないので、留学生とか、知り合いなどつてを頼って、日本語が母語でない人で、英語で話ができる人を探して話すように指示している。必ずしも英語が母語である必要はないと指示している。

そうすると、中国や韓国からの留学生と話したというレポートも提出される。先日は、フランス人の女性と話したというレポートがあった。最近のフランスの全般的な傾向かどうかは分からないが、英語が上手なので、そう言ったら、フランスでは、若い人たちの間では、英語を話せることが格好いいと思われているので、自分もがんばって話せるようにしようとしたという返事が返ってきたそうだ。そして、日本に来たのは、日本の文化に興味があったからだということだったと書かれていた。

実際に英語で話をした学生の人たちは、自分が流暢に英語を話せないという不満を感じたかもしれないが、レポートを読んでいると、話をしているいろいろ情報を得たり、驚い

たり、コミュニケーションを行っているので、英語でのやりとり自体が、英語を活用して、情報を得ることになっていると言える。それが重要であることは間違いない。

4.4 原理力関係の実験に参加することで成長する

以下は、原子力関係が専門の先生から直接うかがった話である。ある大学に原子力関係の実験施設があつて、1週間程度泊まり込みで実験に行く。実験に関して、時間順にどういうことが想定されるかという表を作る。しかし、何が起こるか分からない側面もあるので、そういう可能性も考えに入れて、複数の予定表を作る。そして、実験を始める。学生は、場合によっては、折りたたみ式の椅子を並べて仮眠するなどしながら、実験を予定通り継続する。何かあると必要な対処をする。その先生によると、実験に参加する前と、後とでは別人ではないかと思えるほど育つ学生がほとんどだということである。

この実験で学生が育つことに関して、それは直接学習ではないかと考える人がいるだろう。しかし、本稿では、直接学習を狭く考え、間接学習を広く考える方が、日本の教育が直接学習に傾いている問題をはっきりさせられるという意味で、望ましいと考えている。

4.5 協調学習

教師が教え、学生が学ぶというだけでなく、学生同士の *interaction* を重視しようという方向は、すでに世界中で様々なところで取り入れられている。一つの有力な協調学習の対象は、母語である日本語での作文、そしてさらに、英語での作文が考えられる。教員がいた方が、問題点の指摘はしやすいだろうが、自分の書いた作文の問題は、自分で見つけることは一般的に難しい。しかし、人の作文の問題点を指摘することは比較的やさしい。そして、他の人の書いた作文を読み問題点を指摘するという経験から学べることは多い。

これは、研究者が、まずドラフト書いて、それを内容が分かる多くの研究者に配り、コメントをもらい、ドラフトの手直しをするということと、本質的には違わない。

ある同僚が、かつて文章に書いたことだが、知性には、自分の専門ではないことに関しての話聞いて、意味のある質問を出来る能力が含まれる。人の書いた文章の問題点を指摘することはいい訓練になるし、重要な能力を身に付ける機会でもあり、欠かせないことである。

もう一つ重要なことは、3-4人のグループを作り、そのグループごとに何らかの課題

に取り組み、協力しながら、議論しながら、課題に取り組むことで学ぶということである。こういうグループで課題に取り組むということは、セミナーなどで、既に行われていると思うが、グループで行ったことをどう評価するかという点の検討が重要である。

4.6 こざね法

日本語で作文を書こうとする人が、いつでもだれでもできる一般的な方法として、梅棹（1960）がこざね法という方法を紹介している。これは作文の本質をきちんと押さえた方法で、ここで取り上げたい。パソコンが普及すると、さまざまなことがパソコンで出来るようになったと考える人が多いのではないかと考えられるが、パソコンの画面ではうまくいかないと考えられる問題を指摘していることにもなっている。

詳しくは、梅棹の説明を参照して欲しいが、簡単に説明すると以下のようなになる。

これは、全体を見渡せるようにするために、ある程度広い平面が必要になる。大学にいと、あいている教室の床なども使え、場合によると、メモを白板に借りに貼り付けていくということも可能である。

例えば、A4の紙を8等分から16等分した紙をたくさん用意する。そして、思い付いたらどんどん書きこむ。1枚の紙には、一つのことしか書いてはいけない。眺めて、必要なことを書き足す。一番下の方は、一つの文章を書く。そうすると、丁寧にきちんとやると、レポートも論文も出来てしまう。

一時期、アイデア・プロセッサというような名前が出ていたソフトと似ているが、簡単なメモを貼り付けるというだけでは、全体を見渡すことができないという意味で無理がある。パソコンの画面の大きさ、広さの問題があるので、パソコンで動くソフトでは、梅棹忠夫が考えたことを実現することは難しいだろう。

この方法の一番いいところは、やろうと思えば、誰にでもできるということだ。梅棹は、日本語の作文を想定しているが、英語の作文にも、当然使える方法である。さらに言えば、何語の作文にでも使えるであろう。

作文や論文を書くことに関して残っていることは、他の人に読んでもらって、コメントをもらい手直しをするという過程であろう。これは欠かせない過程である

図書館などで、論文などの添削をそばに行うということをやろうとしている。筆者の意見であるが、英語の作文の添削に関しては、津田塾で伝統的に行われてきた方法がよいであろう。そばについて添削する必要はない。時間を取って、赤を入れたものを返し、必要であれば口頭で、補足の説明をすればよい。

さらには、添削のプロではない学生・院生同士が、お互いの作文、草稿を読んで、コメントを言い合うことが、お互いに勉強になるであろう。こう直した方がいいのではな

いかということ指摘することから学ぶということ大事にすべきだ。プロが直すとそれで終わり、せっかくの協調学習の機会をなくしてしまうことになり、それはもったいない。ここで考えていることは、専門の研究者になった人自身が、ドラフトに興味を共有している研究者に配り、コメントをもらって、手直しすることと本質的に変わらない。

5. 満点が無い課題にいどむ

5.1 ヴァーチャル・リアリティの作品を作ること

ランディー・パウシュが、自分が10年間担当したバーチャル・リアリティの作品を、学生がグループで作って発表する会について、学生の伸びる力は予想外で、教員の側が先に限界を作ってしまうのはよくないという自分の指導教官に相談したときにされた助言を紹介している。そして、その通りで、学生は、限界を設けなければ、どんどん先へ進み続けたと言っている。

満点がない課題、一つの基準だけで測れない課題に挑戦する機会を学生に与えることが大事だということに議論の余地は無いだろう。日本の近代の大学は、医学や工学などの実学系の学部が先に作られ、芸術系は、後から単科大学として作れら、それがずっと続いているという不幸な歴史がある。

もちろん、工学の建築とか、他にも様々な設計を行っている研究職の人たちは、正解が一意に決まるわけではないことをやっておられるのだろう。それを、学生が1、2年生の時期に体験できるようにしたい。

同様のことが、日本語や英語に関しても考えることができる。一つは、スピーチ・コンテストだ。そして、もちろん、芝居などで競うということも考えられる。

5.2 農業

しばらく前から農業に興味があって、いろいろな体験もし、経験のある人から話を聞く機会も増えている。そして、知り合った兼業農家の男性に言われたことが印象深かった。農業をやろうという人が増えている。そして、親しくなって、いろいろ教えて欲しいと言われる。しかし、農業というのは、自分のノウハウの蓄積だという面があって、言ってみれば企業秘密で、どうしてそれをほとんど経験のない人に教えないといけないのだと言われたことが一つ。もう一つは、実際の農業は、個々の田んぼや畑によっても、全然事情が違うので、その年の気候の違いもあれば、自然が相手なので、こうすればいいという正解を示すことが難しいというのだ。自分で、工夫して、試行錯誤しながら、

どうするかを決めていかないといけないことが多いということだ。

これは考えてみると、学校の科目の試験のように正解が一意に決まることなど、実際の生活ではほとんどないので、言ってみれば当たり前のことだと言える。ここまで考えてくると、言葉でのコミュニケーションも、社会生活の一部だとすると、外国語の学習も、生活の一部であることを忘れない方がよいということが見えてくる。

6. 最後に

本稿では、しばらく前から筆者が考えていることと、人から聞いた話をもとに、今後の大学教育で重要になるであろうと考えられることを論じた。直接学習を否定しようと考えているわけではない。本稿で論じたような間接学習を活かすことを考えることが望ましい場合が多々あるのではないかとということが結論である。

*いちいちお名前を挙げないが、本稿で論じた問題について、過去に筆者に意見を聞かせて下さった方々、また興味深い話を聞かせて下さった方々、筆者と議論して下さった方々に感謝する。

本稿として、名古屋大学が打ち出している「勇気ある知識人を育てる」という目標について論じる。まず、いつ頃どうしてこの目標を掲げるようになったのかという歴史的な経緯を明らかにする必要があるだろう。そして、「知識人」ということを問題にするのであれば、世界的に知られたノーム・チョムスキーの知識人に関する主張を取り上げる必要があるだろう。知識人のすべきことは、真実を明らかにすることだという主張である。その考え方が妥当なものだとすると、「勇気ある知識人を育てる」というのはそんなに簡単な目標ではないことが明らかになるのではないか。

名古屋大学出版会から、「誇り高い技術者になろう」という本が出ている。ここでも、難しいけれど大事なことが論じられている。しかし、個々の人が考えることについて論じるのはいいとしても、そんなに簡単にできることではないと考える方が自然だろう。

さらには、大学で受けた教育、学習を短期間で評価するのは、拙速な面があることも意識しておく必要がある。長い目で教育・学習を考える観点をおろそかにしないようにしないといけないことに間違いはない。実験心理学では、刺激に対して短時間の反応を研究してきた長い歴史があるが、長期間の間の変化についても研究されるようになってきている。同様のことを考えないといけないだろう。

さらなる後書き。

本稿で論じたことの問題点を指摘したい。まず、今まで行ってきたことを大きく変える必要があるのかどうかを慎重に考える必要がある。変えることを前提に議論すること

自体に問題があると考えないといけないだろう。ある民間企業から大学に移って来た人が、大学というのは組織改編をはじめ、いろいろ変えるのが好きですねという感想を漏らされたことがある。

さらに、数年前に定年で退官された人が、20年くらい前に名古屋大学に移ってきて以来、ずっと英語科では、英語の授業の改革を議論してきたということを、個人的に私に言われた。実際、ごく最近もかなりの議論の末に大きなカリキュラム改革を行ったばかりである。

本稿では、重要だと考えられる可能性を指摘した。しかし、それをすぐに実現するというのを想定しているわけではない。こういう問題を議論することと、実現する案まで持っていくこととは分けて考えた方がよいだろう。

さらに、教育改革は、何か変えようとする、場当たりのだと批判されたり、管理職になると、保守的な対応をされると言われることがあるし、改革を議論する人たちの数が多いと、しかも議論が長時間にわたると、変更する方向でまとまるかと思われた議論が、振り出しに戻るような方向に大きく動くようなことも起こる。人間の意志決定の過程を考えるとそういうことも起こる。

ただ、グループに分けて課題をやってもらうなど、自分が担当する授業で行えることも少なくないので、その工夫は、今までもやってきたが、今後も続けようと考えている。

参考文献

- 梅棹忠夫 (1969) 「知的生産の技術」 岩波新書、岩波書店.
- 黒田光太郎、戸田山和久、伊勢田哲治編 (2004) 「誇り高い技術者になろう：工学倫理のススメ」 名古屋大学出版会.
- チョムスキー・ノーム (2006) 「知識人の責任」 青弓社.
- 松本 元 (1999) 「脳のこころ」 「月刊言語」 に 1999 年 1 月号から 1 年間にわたって連載.
- ラーマン、スティーブン・R.、宮川 繁 (2002) 「MIT オープン・コースウェア・プロジェクトにおける決断とチャレンジ」 「IDE 現代の高等教育」 vol. 440, pp. 55-62, IDE 大学協会.
- ランディー・パウシュ/ジェフリー・ザスロー (2008) 「最後の授業」 ランダムハウス講談社.
- Clark, Gregory (2009). What's wrong with the way English is taught in Japan. *The Japan Times*, 17, February 5.
- Clark, Gregory (2010). Saving Japan's universities. *The Japan Times*, 13, August 17.

